

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第四十一号 (二〇〇九年十月)

風に吹かれて (09 10) 白井啓治

『良いではないかよもやの歳でもと蟋蟀の声』

随分と前のことになるが、これまで何度もの新人デビューを果たしてきた、というようなことを書いたことがあった。この会報の原稿であったかどうかは忘れてしまった。

少し以前に流行ったマルチ人間にあこがれているわけではないが、目標としている一つのこと集中して努力を積み重ねていると、努力に付随してやらなければならない枝が次々と広がってくるものである。それで特別に覚悟を決めるわけではないのに、次々に芽吹き、伸び広がってくる枝での新人デビューをすることになる。

本業は、いや幹は脚本家なのであるが、脚本を書くためには演出という事も勉強をしなければならぬし、脚本を書いていると、どうしても他人の演出に対して感性や考え方の違いからくる違和感が生じ、この本は自分が演出をやりたい、というよつな事が生じて来て、演出家としてデビューすることになる。

演出をやっていると、自分の創りたい作品を創るためには、自分がプロデューサーにならないと難しいとプロデューサーのデビューを果たす、とい

った塩梅である。

小説家もそうであるが、脚本家というのも新しいテーマ、モチーフが決まるとそれについて、資料を読むだけではなく、専門家以上にその事について勉強をし直さなければならぬという側面がある。自身の新人デビューで面白い、というかわわっていたのは、プロゴルフアー志望の研修生にメンタルマネジメントの指導を行ったことである。脚本や演出は人間の葛藤を描くものであるから、メンタルマネジメントの内容は、どちらかと言うと日常業務内のようなものである。特にメンタルマネジメントの中の重要な柱であるイメージトレーニングなどは、そのスタートが演劇からであるので、まあ日常の業務の中といえる。

その生徒は、取敢えずはプロゴルフにはなつたが、望みが小さくトーナメントプロとしては活躍できなかったし、この先も無理であろう。

脚本などというものの総じて下世話なものなのであるが、物語：人間の葛藤を書く以上、人間好きで、観察好きで、面白がりやである事が要求される。特に面白がりやである事は、絶対的条件ではないだろう。

五年前に小林幸枝という人材に出会い、朗読語りを手話を基軸とした舞で表現する朗読舞を創出したのであったが、朗読をする人材の育成が叶わ

ず、取敢えずは自分で朗読をすることとなった。その時はあくまでも暫定的な積りであったが、小林幸枝の更なるステップアップのために、演出家の余技的な朗読ではなく、朗読俳優として枝を確り伸ばすことが必要となつて来た。それで今度は、よもやの歳で俳優としてのデビューを果たさなければならなくなった。

脚本、演出、俳優というのは同じ線上に思われるが、決してそうではない。脚本と演出はある意味同一線上にあると言えるが、俳優は全く違う線上のものである。

脚本家を目指すきっかけは、舞台俳優へのあこがれであった。しかし、実際に演劇を始めてみると、舞台映え、スケール感といった生まれ持ったなければ訓練では成せないものの欠けている事に気づいたことでの方向転換であった。

ところが今度は、肉体動作のスケール感のなくとも可能な朗読俳優へのデビューを果たさなければならなくなった。小林幸枝に朗読を提供する俳優が育たないからである。

年々思つのであるが、自分もいつまでも若くはない。自分の元気にも限りがある。60も半ばを過ぎると、己の死後に対する責任も考えねばならなくなる。朗読俳優がなかなか育つてこないのであれば、また可能な時期である今、朗読俳優デビューをしなければ、折角発見した逸材、小林幸枝を埋もれさせしてしまうことになる。それを仕方ないという事はあまりにも無責任である。それで、良いではないかよもやの歳でと蟋蟀の声」なのである。

ことは座を立ち上げて3周年での新しい覚悟が生まれた。また忙しくなる。死んだら幾らでも寝

られるから心配しなさんな、と言い聞かせ、納得する秋の夜である。

歴史ガイドに同行して(15) 兼平ちえり

今回の常陸国風土記を歩く会の皆さんへのご案内は、旧石岡の北西端にある龍神山、その南の山麓に広がる台地にある平成2年8月にオープンした常陸風土記の丘の園内です。

龍神山を背景に南に広がる台地は「生涯学習の里づくり」並びに「鹿の子史跡公園整備」事業を計画したことによって昭和63年8月から平成元年2月まで石岡市教育委員会によって発掘調査が実施された。その結果、台地上の全面に集落跡の存在が想定され、旧石器時代から奈良時代にわたる大遺跡であることが判明した。これが宮平遺跡である。そこに常陸風土記の丘が造られました。

風土記は西暦七二三年、元明天皇の詔によって編纂された奈良時代の地誌で、地形、産物、地名の由来、土地の昔話などをまとめた報告書である。編纂、提出された全国の風土記の中で、今日までまとまった形で伝わっているのは、常陸、播磨、出雲、肥前、豊後の五ヶ国の風土記にすぎず、その中で、常陸国風土記は他の国の風土記に比べ、すぐれた漢文調で書かれていることから、編纂者は学問的素養の高い人であったことが指摘され、当時の常陸国守・藤原宇合(藤原不比等の三男で藤原鎌足の孫にあたる)の名が挙げられている。宇合は、西暦七一九年から七二三年(25歳)29歳)までの在任期間に奈良時代の歌人、高橋虫麿

呂らと共に常陸国衙において「常陸国風土記」を編纂し完成させたと言われている。

常陸風土記の丘はこの「常陸国風土記」にちなんだもので、古くからつるおいのある文化を築き鹿の子遺跡をはじめ、数多くの文化的史跡や名所旧跡、民族芸能が伝承されてきた歴史の里・いしおかの歴史的財産を有意義に活用し、歴史、伝承、体験学習、スポーツ、コミュニティなど、子供からお年寄りまで世代をこえて心のふれあえる余暇活用施設となっています。

平成二年八月オープン当時は敷地面積が約9万㎡(現在はハイキングコース等、拡張されています)、園内は有料ゾーンと無料ゾーンに分かれています。では、有料ゾーンからご案内しましょう。

(1) 古代家屋復元広場
縄文時代の竪穴式住居から江戸時代住居曲屋まで七棟の復元家屋からなります。

(2) 鹿の子史跡公園
常磐自動車道建設に伴う発掘調査(昭和54～57年)で発見された鹿の子遺跡の一部を復元したエリアです。

漆紙文書や連房式竪穴遺構などが発見され、全国から注目を集めました。この遺跡は八世紀末から十世紀にかけて存在した集落と考えられ、当時の大和朝廷の命により建設された軍需品の製造や修理を行った補給基地と考えられています。その遺跡を町並みごと復元し鹿の子史跡公園と命名しました。

(3) 展示研修施設

展示室は石岡市内で発掘された埋蔵文化財が遺跡別に展示してあります。中でも鹿の子遺跡から出土した「漆紙文書」ならびに宮平遺跡出土の「巴

形銅器」は全国規模で見ても貴重な発見です。

漆紙文書(レプリカ)は、当時の考察資料へ多大な影響を残し、巴形銅器は西日本での出土例は多数あるものの、関東からの例は極めて少なく、茨城県では、その当時、唯一の出土例です。現在のふれあい広場北側から出土しました。

無料ゾーン。

(1) 駐車場

普通車125台、大型バス13台の無料駐車エリアの他、江戸時代後期の曲屋を利用した食堂と、同じく江戸時代後期の建築で造り酒屋を営んでいた豪商の長屋門が有り、事務所ならびに売店として機能しています。

(2) 水際公園

水際公園は金山池周辺のエリアを指し、無料エリアの中核になります。四季折々の花を定植してあり四月の桜(ソメイヨシノ、シダレザクラ、ポタンザクラと一か月楽しめる)、六月の百合(スカシユリ)、七月の大賀ハスなどが開花し楽しませてくれます。

(3) 金龍橋

一般公募して名付けられた「金龍橋」。金山池に架けられた全長50m、幅3mの木橋で現代と古代への「かけはし」となっている。

(4) 時の門

現代の門、中世の門、古代の門を表現した三つの石の門です。現代から古代へ、古代から現代への時の旅を象徴しています。

(5) ふれあい広場とちびっこ広場

芝生の広場でさまざまなイベントが開かれます。ちびっこ広場には、小動物や遊具が置かれてあり

ます。

(6) 会津民家

江戸時代の小松川において肝煎(きもいり)をつとめた豪農・佐藤家を移築しました。

(7) 巨大獅子頭展望台

「石岡のおまつり」に巡行する獅子頭をスケールアップした日本一の巨大獅子頭は常陸風土記の丘の見守り役として人気を集めています。台座4m、高さ、幅、奥行きそれぞれ10m。内部に全国の祭礼玩具(ミニチュア)が展示されている。

すでに何回か散策なさっている方が多いと思いますが、どうぞ旧石器時代からの先人の温もりを肌で感じながら、常陸風土記の丘の秋の装いをこゆっくりお楽しみください。

毎土、日、祭日は有料ゾーン内にて、石岡市歴史ボランティアの会員が皆さんをお待ちしております。必ずや石岡の歴史について新しい発見をしていただけたらと思います。

入園料大人310円、子供150円となっております。又、期間限定の石岡市観光巡回車が、秋二〇〇九年九月〜十一月、春二〇一〇年四月〜六月のいづれも日曜日、祝日に、常陸風土記の丘、茨城県フラワーパーク、やさし温泉「ゆりの郷」等、石岡市の観光スポットを専用車にて巡回開始しています。一日フリー券、大人一〇〇〇円、子入五〇〇円。詳細は石岡市観光案内所 ☎0299・24・5001 (JR石岡駅前) まで。是非、巡回車で石岡の歴史とともに豊かな自然もご堪能下さい。今回は、常陸風土記の丘内のご案内と、多くの方にご利用頂きますように石岡市観光巡回車のご案内もさせて頂きました。

今回は、風土記の丘に近隣して鎮座している村

上佐志能神社、染谷佐志能神社をご紹介します。

(参考資料・常陸風土記の丘ガイドより)

祭り太鼓に 金木犀も匂いのすがた舞う ちえこ

初めてサインを貰っちゃった 小林幸枝

9月21日、22日、ギター文化館でフラメンコの祭典が行われました。この祭典に、テレビドラママ水戸黄門の格さんでお馴染みの伊吹吾郎さんが特別ゲストでおみえになりました。

ギター文化館でアルバイトをさせていただきもう二年になりますが、ゲストの方と話をしたりすることは殆どありませんでしたが、今回は、私も大好きで見ている水戸黄門の格さんだったので、いろいろお話をさせていただきました。

耳の聞こえない私が、繊細な音を聴かせるギター文化館に仕事をしているのに驚かれた事と思います。私が、補聴器をつけると、きれいな響きがある時は聞こえるのですよ、というビックリさされていました。冗談に下手糞な音はだめです、と言うと笑って下さいました。

伊吹さんは、とても気さくな方で、私の身振り手振りの手話と筆談にも優しく応対して下さいました。

木下館長に、サインを頂いても構いませんかと、お願いしたら、快くサインをしていただき、記念写真も撮って頂きました。今まで、誰かにサインを頂いたり、写真を撮ったりした事がなく、伊吹

さんが初めての体験でした。

伊吹さんにサインを頂きながら、いつか私の朗読舞を観に来て頂けると嬉しいな、と思いつながら、頑張つてやっつていこうと改めて自分に言い聞かせました。

伊吹さんが帰る時、小林さんよろしく、と言つてました、と木下さんに聞いて、私のことを覚えて下さったと嬉しく思いました。来年も来られるとの事ですので、再会を楽しみにしています。私もそれまでに、女優としてもっと精進しなければと言ひ聞かせています。

ギター文化館

2009 CONCERT SERIES

- 10月11日 マリア・エステル・グスマン ギターリサイタル
- 11月 1日 長谷川きよしコンサート
- 12月6日 アンドレイ・パルフィヴィッチ・ギターリサイタル

ギター文化館 〒315-0124 茨城県石岡市柴間 431-35
 ☎ 0299-46-2457
 Fax 0299-46-2628

真面目でした

伊東弓子

野分けだつ頃、この風が吹き始めると遠い日のことが懐かしく思い出される。

「将来の基礎造りの為に頑張ろう」

と約束し合つて仕事を始めた日、十月一日を迎えるからだ。

前日は風雨が強く電線を唸らせ、雨戸を叩き不安を煽るかの様に夜通し続いた。未知の世界に入つて行く私にとっては、明日は晴れるという気持ちだけだつた。総代さんからの五色の幕、父の友人からのオルガンと妹の書いてくれた「動物の綱引き」の絵が本堂に用意され、明日集まつてくる子供達を待っている。木の葉も柿の実も沢山落ちたことだろう。朝一番に境内を掃くのが仕事だ、と床に着いた。

翌日は上天気、総てのものが門出を祝つてくれる様だつた。妹弟は学校に出かけて行つた。今迄お世話して下さつた人達が見守つてくれる所へ三十七人の子供達が集まつて来た。この日を迎える決心をしたのは半年前、高校を卒業したばかりの四月だつた。

社会に出る前に治したいという父母の気持ちに沿つて手術をすることにした。桜の花をあちこちに見ながら大きな町の小さな病院に行つた。地元には病院もなかったし、整形外科という名さえ知らなかつた田舎者の私にとつて、その周辺は落ち着く風景だつた。流れに沿つた町の佇まいは木造が多く、大洗に行く電車通りは商店街だつた。病院も木造の平屋造り、正面玄関の棟から長期療養の人と軽傷患者の二棟に分かれていた。

私は高校の制服で母と待合室にいた。間もなく

診察室から出て来た人がいた。この人はどこが悪いかたと心にかかつた。診察の結果来週手術をすると決まり、話しを聞いて出てくるとその人はもういなくなつた。母は、

「よかつた。よくなるね。本当によかつた」

と言つてくれた。私は左程気にしていなかつたが、父母にとつては長い間心を痛め辛い思いを重ねて来たのだと今深く感じている。

手術入院の為、病院に行くと同週と同じ所にその人はいた。会釈をして向かい側の所で母と話をしながら待つた。その中に、

「真面目そつな人ね。義勇軍の様な人だね」と言つていたことを覚えている。

入院生活は楽しかつた。軽傷患者は六人で手、足にギブスをしている程度だつた。休憩室に集まつたり一番年上のお婆さんの部屋でお喋りをしたり、将棋をしたり、毎日毎日繰り返しても飽きなかつた。私は小さいやつこさんを作つて挟み将棋も用意した。

母は二丁三日に一度、二時間近くかけて来てくれた。半日位は一緒にゆつくりした時の流れの中で幅広い話しが出来た。汚れ物を持つて帰つて行く母を門まで送つて行つた。ある時、

「農繁期託児所をして欲しいという話があるんだけれど手伝つてくれる？ どう？」

と言われた。私は、

「いやだよ、東京へ行つて働くんだから」

と答えた。当時は誰もが生活が大変だつた。働いて仕送りしたいと考えていた時だつたから話しは跡切たまま。母はどんな気持ちで帰つたのだらう。現実の自由で楽しい生活の中にある私にとつて、将来を決めつけられる様な話は厭だつた。

母と合つと続きの話が始まる。

「ここへ二年の農繁期に溜池に落ちて亡くなつた子が二人いるの。民生委員さん達が春、秋の農繁期間に託児所をして欲しいという話があるの。やつてくれる」

「だつて…そつしたら東京へ行くの止めることになるんでしょ？」

母は丁寧に話を進めていきながら

「貴女はきかん坊そつに見えるけれど、心は優しさでいっぱいの人よね。学校時代も施設によく行つたりしてあげたものね」

寝め上手な母の声をよそに「でも私は…」と思つていた。退院までの三週間、何度繰り返された事だろう。いつも平常心でせつせと語つた母の言葉に少しづつ心が動いていった。

「お父ちゃんも私も年が大きくなつたから、実際に子供を見るのは若い貴女にやつて貰いたいの」

「お寺の仕事はね、お葬式やご法事も大切な事、それらも生きている人の心を育てるために行つてつ一つなのよ。幼い子の心を育てる事は本当に大事な仕事よ。私達は朝鮮の小さなお寺で朝鮮の人の子も日本の人の子も分け隔てなく遊んだり、勉強したりお裁縫を教えたりして来たのよ。中途してここへ戻つて来たけれど、あの頃の思い出をもつて一度していけたらと思つたのよ」

「お寺は生きている人の心を育てるところ」

その言葉に長い母との話に私なりの灯をともした時だつた。

「手伝つよ。一緒にやろうね」

皇太子、美智子妃のご成婚式もあつて花から若葉へと希望に溢れた時だつた。

退院の後は縮じんだ筋や筋肉を解す痛さに耐えた。目の見えない先生は優しい声をかけてくれたし、入院で一緒だったあの人もマツサージで顔を合わせるの心が弾む思いだった。どちらが言い出したか覚えがないが、終わるのを待って二人で病院を出て川の流れをお喋りをして歩いた。

入院中は個人的には話をした事もなかったけれど、若さゆえか、引き合うものがあったのか楽しく翌日以待たれた毎日だった。秋から始まる託児所の手伝いの為に途中下車して見習いとして勉強もした。私の一生の中で勤めという形はこの五ヶ月間だった。

一ヶ月半一緒に歩いての道々にたくさんのお話をしている中で、「私は百姓を手伝って行く」、「私は秋から農繁期託児所を手伝って行く」ということでお互いに将来の基礎造りをする為に頑張っている。オリンピックのある五年後に合おうという話が纏まっていった。

その人は両親が満州開拓で頑張ってきたが、何も持たずに戻って新しい土地に入植したそこで酪農を始めたという。だから両親を支えていくという決心を聞いた。そして、何時もの様にバスと汽車で別れたけれど悲しい思いはなく、五年間頑張っていくことが、励まし合い努力し合ってお互いを高めていく素晴らしいことだという思いで一杯だった。

現実には甘くはなかった。理論的な知識も技術も無い私は次々に問題がぶつかった。子供の可愛さだけでは解決しなかった。今思うと父母の言葉や思いも理解して、師の言葉にも支えられたがそれ以上に若い私にとってその人との約束は大きな力だった。

今なら想像もつかないでしょうが、簡単に出かけたり、遊ぶ時間も取る事は無理だった。それはお金が無かったし、みんなが働く事に一生懸命だったからだ。手紙はよく書いた。返事は滅多に来なかったが理解しようとした。百姓の一年生が生きまものを二十四時間世話する様子が想像できたからだ。電話もお互いの家にはないのだからその人は集乳所で私は役場で借りるのだからお互いに遠慮した。偶然役場の玄関前から「ゆみちゃん電話だよ」と大声で呼んでくれた時は急いで走って行く私だった。日本の農業が斜陽化していく中で酪農の事情も解った。私も無許可の問題、資格を取る事を背負っていた。

竜胆の咲く山の寺へ、三角溝蕎麦の畔を涙しながら浜の寺へ行った。菜の花の咲く畑の道を町の寺へ、蓮の花の咲く大きな寺へと行った。何を求めて歩いたのだろう。その度に次への道を歩けた。真面目だった。純粹だった。その真面目さや純粹さが次へ進む力だった。

どんなにか待ち遠しかった便りが三十八年の暮れに届いた。将来の見通しが何とかついたので合うことにしよう」という。すぐ話しが纏まって大洗に初日を見に行くことになった。弟の応援ももらい、山道を6号まで送ってもらった。国道は自転車で行き水戸駅からはオートバイで大洗に向かった。日本の輝かしい夜明けと、自分達の5年間の努力を湛え合う為に初日をお詣りした。男と女という意識より、お互いの仕事の話に花が咲きつきなかつたが梅の花公園で「立候補しておきます」と聞いて驚きながら嬉しくもあり、戸惑う気持ちも出て苦しい思いも生まれたのは事実だった。蟬時雨の寺で座禅をしたり、研修会の後その人の

恩師のいる萩の名園で合った。合うのは楽しかったがいつかは結論を出さなければと人生の分岐点に立つ自分だった。こんなに辛い年になるうとは思ってもみなかった。父は「本当に好きだったら、ぐたぐた考えていないで飛び込んでいけ」と背中を押してくれたが、私はそれが出来なかった。

師走の風の吹く頃（橋のない川）の演劇を観た後、お互いの道を進むことを語り合い、交わる事もなく別れたのだった。帰りは出会いからのことを思い出し、恥じることのない思い出の二つ二つ。一緒に歩いて私も少し後から歩いていたら、くつつく事も手をつなぐこともなく、純粹なお付き合いだったと思うと踏ん切られた。今でも誇りに思っている。

五年に一度は人生の同志として、無事で頑張っている事を一枚の葉書で知らせた。綿つ詩には年々重荷のしかかって来た。後をやる人が出来ればいつでも引く積りでいたのに、次々に起こる問題、身に降りかかる出来事に対処していかねばならず続けねばならなかった。もつともあの分かれ道で選んだ道だからとそのことが頑張る力となった。

二十五年たった時訊ねる事にした。周囲の環境に耐えられない状態（住宅が増えた。後継者がなく止めた人が多い）になり、止めるか移転かの選択をせざるを得ない中で、代替地を求めて栃木の方へ行った事がわかった。

「ご両親の苦労などを忍んで遠い地を思った。私達の人生も半分以上過ぎた事を思って、仕事を越した母の年齢の時、那須の地へ一人で行った。その五年後主人とも行った。退職を前にした年には自転車で行った。玉里がなくなる合併の年には友

人と行った。那須連山の麓の広い土地に沢山の牛がいたが、乳製品の減少、後継者問題、観光化されてきている周囲に不安を沢山抱えていた。家庭内も娘さんがお嫁に行ったり、お母さんが亡くなったり、長男さんが後をやってくれている。地域のリーダーだったお父さんが弱くなったりと、時の流れと共に家庭も世代が変わるうとしていくが、訊ねる度に感じた事はいつも暖かく迎えてくれる人がいたことだった。間違っではいなかったのだ。人生の同志だったと改めて思える自信に満ちて帰って来た。

今年の仕事は始めて五十年という記念する年だ。私は現役ではないが、皆が確りと仕事をしている。創始者の心を忘れることなく行われているのが嬉しい。父の誠心誠意やれという言葉、母の弱い子程手を差し伸べての気持ち、そして寺の人を育てる所、を大切にしている。

時々園に足を運ぶ私は現役の頃の厳しいカラーはすっかりとれて穏やかな境地で行く。両親から引き継いだ弟夫婦は私立つぶしの風の中、批判を背に受けながら地域の中で踏ん張って来た。意見を戦わせてきた職員の何人かはリーダーとして立派だ。公立と違って金銭的に時間的にも並大抵ではない犠牲の中で職員の善意に支えられてきた。今、甥や姪を中心に若い人達の力に移ろうとしている。科学や機械中心に負けない人の心を育てていって欲しいと願う。

大人の背負っている重荷を軽くしてくれるような綺麗な瞳で「お婆ちゃん遊ぼう」と言ってくれる。後輩達は「また来てくださいね」と帰りがけに言ってくれる。幸せな事だ。

あの日、将来の基礎造りに頑張ろうと約束し合

った貴方の存在があつてこそ、今日の日を迎えられました。お礼を申し上げます。五十年のお祝いのお知らせを差し上げます。是非いらして下さいね。お待ちしております。

同じ時代に生きた人生の同志として、生命ある限り「真面目」にいきましょう。

稲刈り報告

松山有里

9月26日ふたば自給農園の稲刈りが行われた。みなさんと一緒に植えた苗が、たくさんの実をつけた。一粒万倍とまではいかないけれども、たった一粒の米がこうして何倍にも実をつけて私たちを養ってくれるこの事実。先祖代々からの深い愛が田んぼには満ち満ちている。

まずはふんどし侍によるデイズリドゥが田んぼの神様に捧げられて、稲刈りが始まった。はじめでこんなこともやって見たが、とてもよかった。デイズリドゥの響きに答えるように稲が揺れ、みんなの心もひとつになったような気がする。どこかほかの農園ではかならずホラ貝をふいてもらうという話をきいたことがある。そうすると風がふわあーと吹いてくるのだそうだ。もともと昔からある民族楽器は自然の神様と人間の交信のためにあつたときいたことがある。自然界にある音は雑音が多い。だからそのような楽器はわざと雑音がでるような設計になっているらしい。ホラ貝やデイズリドゥなどの振動で音をだすような楽器は特に風と大地に呼応するような感じがする。

いよいよ稲刈りが始まった。今回はにぎやかで

一五人くらいで行った。刈り始めたらあつという間に稲が刈られていくので、これはすぐに終わるかも、と思つたがそうは問屋がおるさなない。たんの向こう半分は非常にぬかるんでいて、長靴が泥にとられて、動けなくなる人があつちこち。刈つた稲を置く場所も探さないとおくことができないう状態だ。そこからかなりペースダウンして、結局、はぎに稲をかけたのは夕方の五時くらいになつてしまつた。「やあーっ、終わつたあー！」といううれしそうみなんの声、はぎにかかった稲をバツクに記念写真撮影を終え、さあ帰ろうとついうだんになり、稲がかかったはぎがボキリと折れた。「写真撮影が終わつてからでよかったね。」という言葉で救われたが、もう暗くなりかけていたので、もう直すのは後日にした。

本当に久しぶりに会う人達といろんな話をして楽しい一日だった。「ほら、この前はじゃがいも植えたとき」そうか、もうそれから半年も経つてしまつたんだな。お互いに近況報告をして、最後は「またね!」と言える友人たち。稲刈り自体も胸のすく楽しい作業だが、なんといつても、みんなそれを味わえるという贅沢さがたまらない。わたしたちの田んぼは一反弱しかないけれど、そこにたくさんの人が居てくれる。はぎを軽トラから運ぶにも人がいればあつという間に終わつてしまふ。一人ひとり長い棒を担いで順々に坂を降りていく、その風景たるやほんの少し縄文の暮らしを彷彿させる場面でもあつた。

いろいろとあつたけれど、また来年もこうして米を作りたいなあと深く心に思つ一日であつた。

ふるさと風の会 3周年展

(文化力がふるさととの豊かな暮らしを創る)

2009年10月13日～18日 ギター文化館

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間達が集まり「ふるさと風の会」をスタートさせ、毎月発行してきました会報「ふるさと風」も今年6月で3周年となり、ギター文化館様のご協力をいただき、10月13日より18日まで、3周年展を開催することとなりました。ふるさととは、物語の降る里であると認識し、文章・絵画・演劇などの表現を通して歴史・文化の再発見と創造を考え、物語を降らす活動を展開してきました。その3年間に生まれた物語を紹介・展示いたします。

3年間の歩み展

ふるさと風の文庫の展示販売、ふるさと風の小窓の展示販売、
兼平ちえこ「風のことば絵」&「常世の国の五百相」展、
打田昇三作品朗読会(12、13、14日の午後2時～3時・朗読：しらぬひろぢ)。

3周年記念特別公開座談会 10月17日土曜日午後1時30分より(無料)

座談会テーマ「今ふるさとに求められている文化力」

出席者 合田寅彦(スワラジ学園理事長)
木下明男(ギター文化館代表)
太田尚一(斎書房出版)
関 仁 (ホルプ)
白井啓治(脚本：演出家)

ギター文化館入館料300円(コーヒー付き)

12、13、14日の朗読会は別途400円の入場料が必要となります。

17日土曜日の公開座談会は無料です。

ふるさと風の会編集事務局

315-0001 茨城県石岡市石岡13979-2(白井方) 電話0299-24-2063

神様もカチンと来るかな

菅原茂美

神様も、前報で『反省しなさい』などと、私に、あれだけクレームをつけられ、ミソクソにケチをつけられては、イササカ、カチンと来るかな？

神様は、全知全能の絶対者であるなら、こんな片田舎のヘッポコオヤジに、文句を言われぬように、もっと、まじめに仕事をすればよかつたのだ。

万物創造時に、粗製乱造の手抜き工事をして、こんな不完全な、極悪非道を平然とやり遂げる、人類」などを創るから、文句を言われるのだ。人類は地球上で決して特別の存在でも何でもない。単なる野生動物の一種にすぎない。DNAもチンパンジーと殆ど変わらない。ただ強欲で、手加減を知らず、相手を殺すまで己の欲を押し通す。象・鯨・狼などキチンと秩序を守る動物に比べたら、できそこないの無法者に近い。それを神様は、地球上のリーダーに据え置いたりするから、私に噛みつかれるのだ。

人類という寄生虫のため、今、母なる地球は多臓器不全の重症寸前だ。人類の無謀な活動のために、他の「種」を絶滅させるなど言語道断である。万物の霊長など自惚れも甚だしい。せめて、総領の甚六ぐらいのおおらかさで、大きな包容力を持った存在でなければ、地球のリーダーとしての価値はない。

食料や資源が有ろうが無かるうが、ただ無制限繁殖を繰り返して、人口過剰でケンカばかりやっている。又、世界の誰が困るうがオレの知ったことじゃない。今のオレさえよければそれでよし。

自由経済だとか規制の緩和だとか、掲げた旗印は立派だが、内実は、弱肉強食のヤブレカブレの世

界だ。先進国ほど野蠻性丸出し。抑制不能症候群だ。カザフスタンのセミパラチンスクに見られた旧ソ連による核実験後の住民健康被害放擲。同じく中国は、ウイグル自治区で核実験を繰り返して、住民には、国家の重大実験場に選ばれたことを誇りに思え！と煽てあげた。だが、白血病などで多数の死者が出たのに、政府はその因果関係を強く否定。人類の恐るべき足跡だ。

先日、アマゾン裸族を、BBC放送の映像で見た。無邪気なあの笑顔。獲物が沢山取れたとか、子供が成人したとかで、一族が集まり、歌って踊ってその喜びを分かち合う。今、この世にこんなにも美しい、こんなにも純真な民族がいたのか……と、私の網膜に、強く焼き付いている。株価が上がるうが下がるうが、誰が政権を取ろうが失おうが、別世界の話。あ、あ、私はそういう世界で余生を送りたい。

（爺の私がそんな夢を見ていたら、ある日、中2の孫娘が真顔で『私は原始時代に生まれたかった！』ときたもんだ。やっぱり、血は争えないものらしい。）

こんな窒息しそうな、醜い競争社会。いたいけな少女の小さな胸を酷く傷つけている。今、教育界は、偏差値至上主義で、画一化した、みんなお利口さんの、変な優等生を育てようとしている。その優等生が作り上げた国家が今どうなっている？ みんな縦割りの狭量で保身主義。国家が減びてもわが省庁だけが、生き残ればそれでよい。ペラボウに積み上げた超巨大借金は、一体誰が、どうやって返すのか？

子供は、自由奔放に育てれば、どんな才能を発揮するかもしれない。汲汲ギシギシの教育制度か

ら、一体どんな英才が育つというのか。野山を駆け巡り、野生の生きざまに直接ふれて感動を受けなければ、科学の芽は育つまい。豊かな詩情も湧いてこない。無限の可能性の芽を、バカな社会が、早々に摘んでしまふ。何と愚かな先進国であることよ！

* * * * *

さて、自分をこの世に贈ってくれた人類を、これほどに頭から罵倒するお前こそ、底抜けの「アホウ」だと叱られるかも知れない。しかし、何と言われようと、道義に反する悪行の連続だけは絶対に許せない。人類は、地球上の生物界の頂点に立つとするのなら、己の利のみに目がくらみ、他を顧みず、狭視野の暴走を続けることだけは、敵に慎まなければならぬ。特に産業革命など先進した列強が、未開地を欲しい儘に侵略した非道な植民地政策など、人間の行為として、絶対に許せない極悪非道の歴史だ。

日本でも、10万人の縄文人が心豊かに暮らしていた所へ、大陸の難民である100万人の弥生人が、大挙押し寄せてきた。金属製武器を振りかざし、穏やかな縄文人を蹴散らし、その子孫であるアイヌ人を辺地に押し込め、支配層となって列島に君臨した。そして大和朝廷とやらを打ち建て、平穩に暮らしていた奥羽の蝦夷（えみし）を再度にわたり侵略する。目を転ずれば世界のどこでも、こんな現象が見られたということ。『人間の性（さが）は、本来『悪』であるとする「性悪説」に由来するものか？

【2009年7月、今更ながら、『アイヌは、日本先住民である』とする検討委員会の勧告を受け、政府はこれから、その審議に入るとの報道を

読んだ。これまで、この問題を放置してきた日本政府は、一体、何をしていたのかと、腹が立つ。（先住民を虐待してきた過去の歴史を、頬被りするため?……）

そして、石岡市高浜にお住まいの鈴木健先生が、2008年10月、「日本語になつた縄文語の辞典」という大作を出版された。日本の言語学の専門家達が、縄文語・アイヌ語・日本語の関連を無視し、日本語の「語源」探しは袋小路から抜け出せないとするのはおかしい。現在の日本語の中に、アイヌ語から縄文語へと遡れる語彙はいくらでもある。言語の化石化した地名などこの列島内に無数にある。縄文語を母語としながら、アイヌ語と日本語とに相違があるのは、アイヌは縄文人直系の末裔であるため、ほぼ縄文語のままであるのに対し、日本語（ヤマト語）は、渡来系支配層の発音習慣に変形されたためとする。しかし大量の漢語流入にもかかわらず、縄文語は、したたかに日本語の中核として生き延びた。そこで先生は、多くの実例をあげて、アイヌ語から縄文語を解読し、日本語の語源解決を提言したものである。大変なご苦労に、心から敬意を表します。】

さて、話は変わるが、地球の歴史を振り返ってみて、地軸のブレとか、小惑星の衝突や火山の大爆発とか、人知の及ばぬ大異変により、全生物の90%前後も絶滅するような事件は、はつきり分かっているだけでも過去5回もあった。天然現象によるものなら、いたしかたないが、強欲な人類の活動のために、他の生物を根絶やしにするなど、どこから考えてみても、重大な犯罪である。人類に滅ぼされた生物達の怨霊が、宙をさまよっている。

地球温暖化防止に関する国際会議場での、先進国と発展途上国との誹謗合戦など耳をふさぎたくなる。いい加減この辺で目を覚まし、神様の課長補佐の補佐チンパンジーは勿論、ゴキブリやダニさえも生き残れないような、無謀な破壊活動に、人類は意を決し、終止符を打つべきである。

結局、地球上は、人類という超エゴイストが猛烈にはびこり、シツチャカメツチャカの無法地帯となつたのは、神様も、勉強不足で、未来を予測できる眼力がなく、全知全能ではなかったということ。将来このような人類に変転する可能性を見抜けず、リーダーとして選抜したのは軽率であつたということ。

とはいえ、神様も生物が「進化」するという現象を、本当は知らなかったのではなからうか? 700万年前、類人猿の中から仲間達と枝分かれし、樹上生活から平地のサヴァンナに降りて、直立2足歩行を始めた一群のサルの群れ。これが将来地球環境を荒らしまくる、最悪の動物に変身していくとは、神様も気がつかなかったであろう。前足が体重負荷を免れ、自由に振る舞える様になると、あとはトントントン拍子に道具を作ったり、ボディアクションで、仲間と意思伝達を図ったり、絵を描いたり、文字を書いたり、ついにはパソコンを叩き、こんな駄文を書きナグルやつまで出てくるようになった。

それと同時に、500Mにも満たなかった脳味噌が、わずか700万年間に、9種類の化石人類を経て1400Mにも膨張し、ついに現生人類67億人の頭のテッペンに鎮座しますこととなった。その脳味噌が何を考え、意志決定し、世界の歴史にどんな足跡を残してきたかは、皆様よく

ご存じのとおり。心優しい人々は、人類が築いた偉大な文明を讃えて、心から拍手を送ることだろう。私のように、チョットひねくれた者は、人類が残した数々の傷跡にまず目を奪われ、大量虐殺や、自然破壊など絶対に許しがたく、神様の課長補佐ズラした、偽善の顔を、ひっぱたいてやりたい気持ちになる。

そのように、あらゆる生物種の中で、人類のみがアウトロー的な暴走を続けているのなら、これは絶対にどこかで歯止めをかけなければならぬ。

私が神様の相談役だったら、早目にそのことに気づき、生物の進化をもっとスローダウンするよう手を打つたに違いない。地球環境は、そこに棲む生物がもっとスローな行動をとれば、もつとっと楽園になるはず。前にも書いたが、南米のナマケモノのように、ノンビリ木にぶら下がり、鼻提灯でも膨らまし、昼行燈のように日を送る。無駄なエネルギーはなるべく使わない。食物連鎖の問題はあるが、ある種の動物が、無謀に増え過ぎたら、肉食の猛獣ではなく、ウイルスかバクテリアが、キチンとそのコントロールを果たす。いわゆる間引きである。あるいは生殖機能をコントロールして数を制限する。そうすれば、環境汚染にも歯止めがかかり、常世の国の状態を長続きさせることができるだろう。今からでも遅くはない。地球自身にも自浄能力があるし、一応はある程度の知性を持った我々人類が、過去を反省し、未来を見つめて、これ以上の環境汚染に、歯止めをしつかりかけていけば、次世代の子孫達に胸を張って譲り渡していけるだろう。

地球の双子星ともいわれるお隣の金星の気圧は、90気圧(地球は1気圧)、二酸化炭素が95%で、

温室効果のため、表面温度は470℃である。正に熱地獄である。地球の限られた資源を今の世代で使い尽くせば、我々の子孫は何を使えばよいのか？ 子や孫が、かわいくないのか？

話は飛ぶが、今、世界の核兵器の貯蔵量(2万発以上)は、全人類を何回も絶滅させるだけの量に達しているといわれる。やつとその事に気がつき、大同土で、軍縮協議が持ち上がっているというのに、一方では愚かな弱小国が『オレも持ちたい』とイキリ立っている。どこまでバカを丸出しにする気か？

人間の本性とはなんだ？ どこまで愚かなのだ？大量虐殺など、今までに例をあげて何度も述べてきた。そこまでやるのかよ……と多数の例をあげて述べてきた。軍拡など、もう救いようのない愚劣極まりない行為に明け暮れてきた。そしていまだに終焉の見通しは見えてこない。いつそのこと、神様も見切りをつけて、この辺で全人類を回収し、リコールじゃないが、脳味噌を無料交換し、英断を持って、出直させたらいかですか？ 宇宙人がもし、新天地探しにこの地球にやってきたら、チョイト見ただけで『こりゃあかん。生き物が平穩に暮らせる星じゃない』と最初から、相手にしてくれないだろう。地上や海だけではなく、なんと、天空まで宇宙ゴミでいっぱい。そのゴミが、弾丸以上の猛スピードで飛び交っている。地雷は、沢山埋めてあるし、得体の知れぬ化合物のゴミの山。有毒物質の垂れ流しで汚染しきった川や海。それほどまでに、汚しきったこの星を、もし人類に「智慧」というものがあるのなら、さあ、(二)で心機一転、大掃除をやるべきである。一旦この地球のリーダーを、(チンパンジーでは

人類と似たり寄つたりの凶暴性があるから止めにして)、一気に、バクテリアかウイルスに譲り渡す。スペイン風邪なり、天然痘なりを再発させ、適正人口までポピュレーションを縮減する。そして新生物人類で、出直す。脳味噌は、500Mから再出発。石器時代を500万年も続けていけば、いい加減おとなしくなるだろう。勿論、大都会は形成されない。人口密度は縄文時代と同じ、日本列島に10万人程度。現在の千分の一でよい。大学も会社も株式市場もみんないらない。政府も警察も軍隊もみんないらない。必要なのは、お花畑と農園と果樹園のみ。家畜もいらぬ。新人類は、肉食習慣は、即、御法度。肉食するから凶暴性の芽が吹き出してくる。犬歯はもつと退化しろ。平爪はそのままでよい。内臓構造・生理機能は完全に草食性に転換だ。五官の感受性は、ほどほどでよい。地震・台風・山火事・津波など、ノロマながらも感じとって、手を携えて逃げのびる。その程度の敏捷性でよろしい。ほどよい持久力があれば、災難からは逃れられるであろう。文明の香りのする「乗り物」は一切不要。いや、作ってはいけない。便利な乗り物など考えるから、現在の地球みたいに、なんならば、他の惑星にまでも移住(侵略)しようか、などの邪念が湧く。

全宇宙には、銀河は1000億個存在する。私達の住む「天の川銀河」はその一つに過ぎない。そして我々の銀河内には、1000億個の恒星が存在する。さてその各恒星には、惑星を持つものと持たないものがある。その中で、わが太陽と地球のような関係で、知的生命が存在しうる惑星は、この銀河系内に100万個はあるはずという。宇宙誕生から現在まで137億年も経っているとい

うから、当然その100万個の惑星の中には、現在の地球上の生物より、100万年や1000万年ぐらい文明が先行し、大発展している星は、必ずあるはず。あるとすれば、そのいずれかの星から、新天地を求めての侵略や、或いは単なる物見遊山で、UFOの一つや二つはとつと地球に飛んできて、よさそうなもの。しかし、NASAによると、地球外からは、UFOどころか、人工的な電波さえ、一切、飛来していないという。今までUFOを見たなどの情報は悉く、ねつ造か幻覚で、そのようなものは一切否定されている。とするならば、宇宙に飛び立つほどの文明が発達した生命体は、己の欲望にすっかり歯止めをかける「自粛・自制」という文化も、当然並行発展したのではないかと、私は考える。

そこで皆さん、考えてください。地球人も、勇躍、宇宙に飛び立つほどの知能を獲得したというのなら、他の星から知的生命体がこの地球に飛来してこないのと同じように、我々地球人もしっかりと「抑制機能」を発揮すべきではないでしょうか。高度成長期の公害垂れ流しなど負の遺産を清算し、まず足元を清める。発展には必ず矛盾というものが内包する。その矛盾を解決しない発展は必ず崩壊する。反省しつつ前進するのが、智慧あるものの「兵法」と言えよう。

今まで、人類が犯してきた数々の非道を私は指摘してきた。ここで謙虚にそれを反省し、穏やかな生き物への転換を図るべく、検討を開始すべき時期に入ったと考えるが、いかがなものでしょうか？

今ここで神様は、自分の創った人類という、我儘な者に、クレームをつけられ、カチンときたり

せず、も一度人類の再出発に力を貸してほしい。
今度こそ節度ある、まともな生物に成長するよう、
しっかりと見守ってほしい。

征服の大義・六の章

打田昇三

古代オリエント学では、数百万年の長期に亘り
狩猟採取の生活を続けてきた人類が西アジアの
「肥沃な三日月地帯」で農耕牧畜の暮らしを始め
た時期は今から一万年ほど前だとしている。世界
各地には米（中国の華南地方）、粟（中国の河北地
方）、いも（東南アジア）、玉蜀黍（アメリカ大陸）、
雑穀（西アフリカ）などを主食とした農耕文化が
あり、それぞれが古い歴史を持つているが西アジ
アで生まれた麦と豆の栽培が最古であり、他の文
化の影響を受けず、これがユーラシア大陸に伝わ
り人類の歴史に大きな変革をもたらしたという。
人類最古のメソポタミア文明とエジプト文明は
その「肥沃な三日月地帯」で発祥した。食糧生産
に不可欠なのが雨であるが、両方の地域は降雨に
恵まれていた訳ではない。エジプトなどは「雨と
いう言葉が無い」とさえ言われている。メソポタ
ミアも山麓部に雨や雪は降るが南部は少なく地中
海性気候の影響を受けない地域は乾燥している。
なぜ、そういう地域が「肥沃」なのか？

「エジプトはナイルの賜物」と言ったのはヘロ
ドトス（「歴史の父」と呼ばれる古代ギリシアの歴
史家）だそう、確かにナイル河が無ければ何処
まで進んでも唯の砂漠である。ナイル河も普通に
流れていたのでは砂漠地を満足に農耕地にするこ

とは出来ないが、氷河期が終わって規則正しい？
氾濫が起るようになり、肥えた土を沿岸に運ん
でくれたから、その範囲では作物が出来た。

最初に栽培されたのはエンメル小麦（二粒古代
種）と大麦だそう、狩猟時代はナイル河で獲れ
た魚やカバ、ワニ、そして岸辺に居たカモシカな
どを食べていたことが遺跡の調査で判っている。

エジプトに比べれば森や草原などがあり、テイ
ギリス・ユーフラティス両河が流れていたメソポ
タミアのほうは人類に食べられた動物の種類も多
いようで、ゾウ、サイ、カバ、キリン、馬、野牛
から鹿、ガゼル（小型カモシカ）などがスーパ
ーのチラシに載っていたようである。勿論、鳥類や
魚類も見つかれば食われ、リスなどの小動物、蛇、
トカゲなども逃げられなかったと思う。

可哀想なリスたちにとって幸いだったのは三日
月地帯の外周に当るタウロス山脈（トルコ南部）、
ザグロス山脈（イラン西部）、そしてエルブルス山
脈（カスピ海南部）などの谷間とか山麓部、崖地
には山羊が棲んでいた。また現在のトルコ、イラ
ン、ロシア圏の中央アジアなどには羊が居たから
これに目を付けた人類はリスを構わなくなった。
山羊、羊の生息地域は適度の降雨も有り、麦類が
自生していた。「人類は其処に目を付けて原始農耕
を開始した」とする理論が受け入れられている。

その頃、犬も居たようであるが人類が犬を食用
にした形跡は少ないらしく八千年程前のメソポタ
ミアの或る遺跡から出た骨は山羊・羊が半分、豚
が二割、三割、牛が一割、犬が少なかったとか。
食犬（食券ではない）の風習は中国と朝鮮半島に
残るのみとされる。自分のテリトリーを頑なに守
る犬は、早い時代から警備の仕事に就いていたの

工房オカリナアートJOY

母なる大地の声（音）を自分の手で紡ぎ出してみませんか。

あなたの庭の土で...

また大好きな雑木林に一掴みの土を分けてもらい

自分の風の声をふるさとの風景に唄ってみませんか。

オカリナの製作：演奏に興味をお持ちの方、連絡をお待ちしています。

野口喜広 行方市浜2 4 6 5
0299-55-4411

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦
蕎麦会席料理のお店です
（ギター文化館通り）

看板娘(犬)「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。
営業時間 11:30～15:00
16:00～18:00
月・木曜日が定休日です。

電話 0299 43 6888

であろう。飢饉の際には食われたのかも知れない。イスラム教徒はマホメッドが決めたコーランに従って豚肉を食べない。理由はあれこれ言われているが誰も知らない本当の理由を私は察している。しかし支障があるから言わない。(言えない！)

犬は雄を中心に家族主義を通していて怪しい奴は犬仲間でも近づかせない。例外として大型の獲物を獲る時だけ「遠吠え」で他県から他犬を呼び集める。呼ばれた犬はリーダーの統制のもとに一致団結して働き、狩りが終われば分け前の肉を貰ってクビになる。獲物が大型でなくても群れを襲う場合には派遣(犬)されたと思われる。

干支が未(ひつじ)の私は言いたくないのだが、どうも羊は頭が良くないらしく出かけた時には必ず同じ道に戻って来るそうで、犬の集団は羊の道を探知して挟み討ちにした。狡い人間はそれを見て犬を捕らえ飼いや馴らして山羊、羊を掌握させた。食用ながら山羊、羊は群れで行動するから獲れる時には豊漁では無く豊猟になる。生かした状態で長期保存している間に乳獣としても役立つことに気付いた。牛乳が豊富に出回る迄は山羊・羊が代理していたと推定されている。当時の総理大臣が「貧乏人は羊乳を飲め！」と言っただけらしい。

犬のリーダーに教えられたのかどうか、人類でも大型の獲物ならぬ強力な敵と戦うときだけは協力し合い、その強敵を追い払った後は真に恥ずかしながら犬のように喰い合いの戦さを始めた民族があった。大國ペルシアの侵略を撃退した後のギリシア都市国家である。紀元前四三〇年代以降のギリシア諸都市は、説明がつかないほど複雑な敵味方の関係で戦っていた。顧みて、我が日本でも神風に助けて貰って蒙古軍を退けた「文永・弘安

の役」から十年も経たない中に、天皇家の二つの流派が財産目当ての対立内紛を起こし、そのまま戦乱の時代に突入しているから恥ずかしい。

古代ギリシアの歴史には「五〇年間」という項目があるそうで、それは五の章で述べた「プラタニアの会戦」に勝利し、侵略者「ペルシア帝国」を追い払うことが出来てから五〇年間は平和が続くギリシア古典文化の黄金時代が到来した、ということらしい。妙なものでペルシアとギリシアの熾烈な戦いを克明に記述した歴史の父ヘロドトスは戦争が終わった時点で書けなくなつたという。ギリシア系民族でも、ペルシア軍に協力的だった都市国家が「裏切り者」として討たれた記録を最後に長編記録戦記「歴史」の筆を擱(お)いた。

豊かでは無い国のギリシアが次に他國に支配されるのは紀元前一四六年のマケドニア戦争(五の章で述べたカルタゴがギリシア系マケドニア王朝と組んでローマ共和国と戦った)に敗れ、属州となつたときである。紀元前四八〇年にペルシアを追い返し、以後はエジプトの反乱を支援するような形でのアテネ海軍とペルシア軍との戦いなどは有つたが、ギリシア本土は先に述べた「五〇年間」の平和を保てた筈であつたのだが…

「喉もと過ぎれば熱さを忘れる」半世紀が無事に過ぎると、海軍国アテネ対陸軍国スパルタの勢力争いに他の都市国家も巻き込まれて「ペロポネーソス戦争」などと呼ばれる犬並みの喰い合いが始まつた。貧しいギリシアが飽きるほど戦争を続けられたのは、陰でペルシアが「資金援助」をしていたからだとも言われる。怪しい資金を出すほうも悪いが「貰わなければ済む」ので、貰ってからあれこれ言い訳する奴は「犬並み」である。

馬鹿馬鹿しい身内同士の争いの話は省略して膨大な資金をギリシアに「投資」ではなく「闘志」として向けた犬以上に馬鹿なペルシアの王様はどうなつたのか?ギリシア遠征に失敗して、それでも失敗だとは思いたくないので裏口から凱旋してきたクセルクセス一世はそれ以来、王宮で引き籠もり生活を始めて別人のようになってしまった。莫大な軍事費を使って経済的にも大変であつたろうに、などと余計な心配は不要で、日本でも真似るように消費税を上げさせれば済むことである。

暇な王様がすることと言えば、多くの美人を集めて「お医者さんごっこ」ぐらいしかない。日本のドラマでも大奥は陰湿な権力争いが定番でありクセルクセス一世は王宮内の痴話喧嘩が原因で側近に暗殺されたことになっているが、皇太子の陰謀説もある。アケメネス王朝ペルシア帝国には十一人の国王が居て、そのうちの四人は暗殺されたらしいから、危ないと思えば辞められる何処かの総理大臣などと違い命懸けの地位であつた。

次に即位したのは、クセルクセス一世の次男アルタクセルクセス一世である。皇太子だった兄のダリウス二世を阻止して国王になつたとされるので噂どおりならば「父の仇を討つた」孝行息子になる。治世が四〇年に亘り、その間に仇敵アテネとも和解したらしいから戦争好きだつた父親とも違つた。ただしペルシア帝国は足許を見られて服屬國に反乱が相次ぎ、また地方分権を強く要求する官僚に悩まされた。こうなれば他國に攻め入ることとは出来無いからギリシアも安心なのだが…

その後で、居たか居なかつたか分からないような短い在位の王様二人が消えて大國ペルシアを相続したアルタクセルクセス二世は、問題が山積す

る王様の仕事から逃避してハーレムで過ごすか狩りに出るかで毎日を送ったとされている。反乱を企てる側も相互に協力出来る立場に無いから、何もしない無能な王様でも暫くは国家が保てた。

紀元前四〇一年、ギリシアではペロポネーソス戦争にアテネが負け、聞いただけでも元氣が出るスパルタがギリシア圏を支配するようになった。アテネの海軍力を恐れたペルシアの間資金提供が効いたのである。勝ったスパルタは調子に乗って地中海沿岸部の市場にも出沒するようになった。旬の筍と同じで出過ぎて困る。そこでペルシアはギリシアの都市国家でアテネ、スパルタ以外に役に立ちそうなテーベ市を買収し、コリントス市などと組ませて、コリントス戦争を起こさせた。

この戦争はコリントス、アテネ、テーベとアルゴス（アテネ市とスパルタ市の中間にある都市）が同盟して、紀元前三九五年からほぼ十年間に亘りスパルタと戦ったもので、最後には一連の戦争の発火点であるサルディス市（トルコ西南部のペルシア軍基地）にギリシア都市国家の代表者が集められ、ペルシアの主導で戦争を終わりにさせられるという奇妙な結果に終わった。ギリシア系民族にとつては屈辱である。表面上はこれで戦争が無くなる予定だったが、各地で物騒な殺戮事件が相次ぎ歴史的に「泥沼」と呼ばれる時代になった。その頃になつて、ようやく心あるギリシア人はあることに気付いた。ほぼ百年前に、攻め込んで来たペルシアの大軍を都市国家が一致協力して撃退し連合軍は勝利した筈だが、そのペルシアが国家として衰退しながらコリントス戦争終結の仲裁をするなど今なお自分たちに脅威を与え続けているのではないか。その最大の原因は「ギリシア」と

いう統一国家が出来ていないことなのでは？

何度も触れるようだが、民族「ヘレネス」としては同朋意識を持ちながら、国家として一つになれなかったギリシア人は、国土への侵略者であるペルシア人に対する感情もそれぞれに違っていてペルシア軍の傭兵となる者や亡命してペルシアに住む者などが多かった。ペルシアの宮廷には哲学や医学の本場から来たギリシア人の医師や学者が常に居たという。両民族の交流は侵略戦争とは別の次元で進んでいたのである。

その例として、時代は少し遡りコリントス戦争の前のペロポネーソス戦争でアテネが負けた頃に、一人のアテネ人が「自分は哲学に向かない」と悟り師のソクラテスに反対されながらも職業軍人になることにした。名を「クセノフォン」と言い後に作家として大作「アナバシス（遠征・内陸行）」などを著したことで知られる。この作品は多くの史書に引用されており、それに依つて、何もしなかつた王様のアルタクセルクセス二世が珍しく戦場に出て負傷したことが明らかになった。

怪我はしたが、この王様はアケメネス王朝ペルシア帝国で最も長生きしたと言われる。この王に「キュロス」と名乗る弟が居た。帝国創設者の大王と同じ名で図々しいから「小キュロス」と呼ばれており、当時はアナトリア（現在のトルコ）軍総司令官に任命されていた。ギリシアを抑える要衝で資金源でもある都市が多いアナトリアはペルシアにとつて国防の最重要地域である。

国王の地位に次ぐとされたアナトリア軍総司令官に僅か十六歳で任命されながら、幼い頃から両親に可愛がられて「兄貴より、俺のほうが国王に相応しい」と思い込んでいる。兄が即位する際に

も暗殺計画を立てて発覚しており、母親の嘆願で事件は不問に付されたが、性懲りも無く、今度は「自分が生まれたのは父親が即位した後だから、正当な国王は自分である」と主張して行動を開始した。アナトリア全軍を率いて都へ進撃することにしたのである。その時に兵力増強のために多数の外人部隊を募集した。ギリシアでは内戦続きで失業者が多く、言わば仇のペルシア軍傭兵に応募者が殺到したという。クセノフォンもその一人で学者の経歴があつたから士官に任命された。

アテネ市が戦争に負けた年の春に基地サルディスを出発したアナトリア正規軍十万とギリシア人傭兵一万余千の大部隊は、ペルシア国王氣取りの小キュロスを先頭に動機は不純でも堂々とペルシア本土へ進軍を開始した。トルコの地中海北岸を東進して現在のシリア、トルコ国境付近を南北に走るアマノス山地を越えた頃に、傭兵隊の間では「反乱軍ではないのか？」という噂が広がり兵士が動揺し出した。部隊指揮官が「戦闘に勝ちさえすれば高い給料が貰えるから良いではないか」と説得して納まり、夢と欲望で士氣旺盛に、現在のイラク領内へと一気に攻め込んだ。

西軍と言つても両方ともペルシア軍だが、は、イラクの首都バグダッドから一五〇kmほど南のユーフラティス河畔にある旧都バビロンの近くで遭遇し、身内同士とは思えない激しい戦闘を展開して現国王と自称国王も真剣に戦った。小キュロスは兄・国王に切り付け、身体が鈍っていた王様は受け損ねて重傷を負ったのだが、命に別条は無く側近に護られて戦場を退いた。

攻めて来た小キュロスは、川中島の合戦で武田軍本営に斬り込んだ上杉謙信のように、「流星光底、

長蛇を逸し「アルタクセルクセス二世に逃げられた上、張り切り過ぎて敵陣で戦死してしまった。戦況としては勝っていたのだが、総司令官であり今回の謀反の企画者・小キュロスに死なれてしまった遠征軍は途方に暮れた。アナトリア正規軍は「総司令官である小キュロス様の命令に従つただけで何も知りませんでした」と言えば減俸くらいで済むかも知れないが、ギリシア人傭兵隊は雇用契約で小キュロスに雇われた身である。急な会社の倒産も場所が戦場では進退此処に極まる」

孤立した兵力が一万数千なのでペルシア国王側も簡単には手が出せず、また悪い弟のこともあるので「武器を捨てて投降せよ」と勧告した。しかし傭兵隊はこれを拒否して帰国を要求し結局は、ペルシア側が監視部隊を付けて途中まで見送ることで傭兵隊がギリシアへ帰ることを黙認した。

一行はティグリス河を遡り、アッシリア地方の旧都ニネベからカスピ海西方のアルメニア経由でトルコを横断し故国ギリシアへと戻るコースを選んだ。傭兵隊の將軍たちは戦闘中に戦死、又は責任者として処刑されており、残った將校たちが兵を纏めて事実上の退却を開始したのである。

同行するペルシア軍は国王の命令で傭兵隊を見張るのが任務なのだが、昨日まで敵味方で戦っていたからお互いに何となく疑念を持つようになり途中で起きた紛争で傭兵隊將校の多くが消されてしまった。何時の間にかペルシア軍も居なくなり、未知の荒野に取り残されたのは僅かな將校と一万余のギリシア兵たちであった。この時に有名なソクラテスの弟子だったことでクセノフォンがリーダーに選ばれ、見えない敵に囲まれた苦難の道中をリードすることになった

ふるさと風の文庫

新刊

ふるさとの歴史物語に新しい扉を開いた打田昇三の
歴史エッセイ「ふるさと風にたずねて」(才媛の時代)(1000円)
菅原茂美第二作「遙かなる旅路」(2) (定価: 500円)
伊東弓子作「風のかけ」 (定価: 400円)

打田昇三: ふるさと「風にたずねて」(・ / ・ / ・)
(二冊組: 1000円)
菅原茂美第一作「遙かなる旅路」(1) (定価: 500円)

我がふるさとを「風のことは絵」という新しいスタイルのふるさと
表現絵の兼平ちえこの足跡を辿る一行文を集大成!!
ふるさと「風のことは絵」 (定価500円)

日々の暮らしの中にふるさとを想う心を詠いたエッセイ集
兼平ちえこ「風邪に押されて」 (定価500円)
小林 幸枝「風に舞う」 (定価500円)
白井 啓治「移ろう風の中に」 (二冊組: 800円)
近藤治平「風に吹かれて」 (二冊組: 800円)

ふるさと風の文庫は、・ギター文化館: 0299-46-2457
・いしおか補聴器: 0299-24-3881
にて販売しております。

ふるさと「風」の会 事務局 石岡市石岡 13979-2 (白井方)
電話 0299-24-2063

食糧不足に苦しみ、積雪などの自然条件と戦い
渓谷、山地、砂漠を越える苦難の行程を越えて一
同が半年後に到達したのは黒海南岸のトレビゾン
(トルコのトラフゾン)である。海にさえ出られ
れば何とかなる。ギリシア傭兵隊は思わず「海
だ!」と叫び声をあげたという。この話を作家と
なったクセノフォンが著書で後世に伝えた。

傭兵隊の雇い主であった小キュロスは、兄の国
王に対して一度は暗殺を企てて失敗し、更に戦争
を仕掛けて自ら国王に大怪我をさせた。幾ら兄弟

でも其処までやれば「死者に鞭打たれる」のが普
通なのだが、先にも述べたように「小キュロス溺
愛」の母親が居るからアルタクセルクセス二世は
仕方なく反逆した弟の葬式を出した。歴史学では
丁度その頃にペルシア帝国の宗教に大きな変革が
あったとしている。(国王の守護神を増やした)
弟に王位を欲しがられたアルタクセルクセス二
世は、さらに息子にも椅子を蹴倒され、詳細は不
明だが紀元前三五九九年に暗殺されたようである。

権力の座には長く居るものではない。親思いでは無く親が重いアルタクセルクス三世は、自分の行状から判断して安全対策のために王位を狙いそうな近親者は二人の息子以外丁寧な粛清し、各州の権力者の力を弱め、各地の反乱を抑えて懸案だったエジプトの独立運動を強引に止めた。これで安心と一息ついたところを、思いがけない奴に長男と共に毒殺されてしまった。

犯人は国王の側近中の側近でパゴアスと言う宦官（かんがん＝女性社会のハーレムに勤務するため去勢された従者）だとされている。パゴアスは残された王子アルセスを王位に就け実権を握っていたが、数年で失脚したか消されたようである。

これでアケメネス王朝ペルシア帝国の直系王位継承者は居なくなつた。帝国自体も何となく滅亡が垣間見える状態になつていたが、重臣たちが協議してクセルクス二世が、アルタクセルクス二世かの子孫を連れてきて王様に据えた。これが最後の王となるダリウス三世である。

自分で言つたのか、回りの者が御世辞で持ち上げたのかは知らないが「大王」と称したダリウス（ダレイオス）一世以来、執拗に繰り返されてきたペルシア帝国のギリシア苛めは、親不孝なアルタクセルクス三世の死でようやく終わった。

さて薄情なようだが、このあたりで将来性の無いペルシア帝国に見切りをつけて、話をギリシアに戻すことにしたい。ギリシアも餌を取りあう犬並みの戦争に明け暮れてはいたが、ようやく大きな変革の時代を迎えていた。暗殺家系のペルシア王アルタクセルクス三世が毒殺されたのは紀元前三三八年のこととされる。その年には、ギリシアでも都市国家社会の崩壊に繋がる重要な出来事

「カイロネイアの戦い」が起こつた。

カイロネイアは首都アテネから五の章で紹介した「デルフォイ神殿」へ行く途中の、都市国家テーベに近い場所である。ペルシア軍撤退の直接原因となつたギリシア軍勝利の地「プラタイア」が在つた場所からも遠くない。しかし今回の戦闘ではギリシア軍（と言ってもアテネ市とテーベ市）が完全に負けた。陸軍が強かつたスパルタはペルシアの闇資金に騙され、鬱（うつ）病になつていたから戦争仲間に入れて貰えなかつた。当時のギリシア都市国家を代表するようなアテネとテーベの軍隊を撃破したのは、長年に亘つて彼らがバルバロイ（野蛮国）と馬鹿にしていた辺境マケドニアの軍隊だったのである。

「マケドニア」のことは既に巻の章で触れているが、この国は長い年月に亘つて、潰し合いを続けるギリシア人社会から疎外されていた。そのことは歴史家が「漁夫の利」と表現しているようにある意味では幸運であつた。そうかと言ってマケドニアも順調に国家として発展を続けられた訳ではなかつた。ギリシア本土と同じように大国ペルシアの侵入を受けたのだが、反乱の黒幕として最初から憎しみを持って攻撃された都市国家とは少し状況が違つていたのである。

ダリウス大王が遊牧騎馬民族を征伐に来たついでに侵入したトラキアとマケドニアは、最初からペルシア軍の服従勧告を受け入れて属国扱いになつていたので貢物を取られ、軍事協力の義務はあつたが荒らされることはなかつた。当時のマケドニア国王はアミュンタス一世といつた。彼らが勝手に先祖だとしていたヘラクレス（ギリシア神話中で最強の神）から六代目に当る。ダリウス大王

から「ペルシア帝国の宗主権を認めよ」という通告を受け取つた際に、先祖の名において拒否しようとしてペルシア軍の様子を見に行つた。

「井の中の蛙」のようにマケドニアしか知らないアミュンタス一世は、辺りを埋め尽くすようなペルシアの大軍を見て先祖ヘラクレスを忘れることにした。早速、服従の意志を表明してマケドニア王国はペルシア帝国の服属国になつた。この王は軍事面でもペルシアに協力した。忠誠の証としてアミュンタス一世の娘がペルシア王族の許に嫁いでいる。人質に思えなくはないが婿さんはエリート中のエリート、ダリウス大王の同志で大王が最も信頼した武将メガバゾス（四の章参照）の息子であり、結婚当ても父親の後を継いでトラキア・マケドニアの長官に任命されていた。

アミュンタス一世の長男はアレクサンドロス一世で、世界的に有名なアレクサンドロス三世（アレキサンダー大王）は、その名前を継いだことになるのだが血統的には辛うじて繋がる程度でほとんど他人に近い。それはともかく、紀元前四〇〇年代の前半にマケドニア国王として在位したアレクサンドロス一世は父親の方針を継承したから、攻めるペルシアと守るギリシアの間に立つて言うに言えない苦労をしたと思われる。

鳥類と獣とが戦争をした際に蝙蝠（こうもり）はどちらの陣営にも入れて貰えなかつた という寓話がある。この話はかなり古い時代からのものらしいが、ギリシアでは「蝙蝠には歯がある」ために「獣の仲間」に加えられたことになっているという。それを真似たのか意識したのか、ギリシアから民族的に疎外されていたマケドニアの王アレクサンドロス一世は、ペルシア帝国に服従しな

からもギリシアに義理立てをしていた。

暇な王様クセルクセスが自らギリシア征伐に出陣してきたときには、兵員割当に応じて部下をペルシア軍に差し出し、またサラミス海戦に大敗したペルシア側の希望で「同盟条約」を提案するペルシアの代理としてアテネへ行くなど敵のために尽くす一方で、ギリシア軍に情報を流している。

ギリシアの国土からペルシア軍を撤退させる決め手となった「ブラタイアの会戦」では、アレクサンドロス一世が自ら軍勢を率いてペルシア陣営に加わり、向かい合ったギリシア連合軍陣地にペルシア軍の行動計画に関する情報」を知らせたと言われている。結果的には、その行為がギリシアの大勝利（ペルシア追放）に繋がったのである。

そうしていながら、ペルシアの敗残部隊がマケドニア領内を通過して引き揚げるのを、この王様は旗こそ振らなかったが見送っている。尤も敗残部隊とは言っても兵力ではマケドニア軍の何倍もの数で、手出しは出来なかつたのである。もうペルシア軍はマケドニアに進駐しては来ない。

ペルシアとギリシアの間に揺れながらマケドニア王国を保ち、これからはギリシア人の仲間にも入れて貰い一国の王として中央政界にも進出しようと考えていたアレクサンドロス一世であったが世の中、そう旨くは行かない。「臣従協定」を一方的に破棄してペルシアの圧力が解除された途端にマケドニア国内や隣国のトラキアなどで支配者に対する反対運動が起こり始めた。そしてアレクサンドロス一世は、一部の歴史家がそれらの反乱に関わり有りとみなす謎の死を遂げる。

王には三人の男児があり、長男がベルデッカス二世として王位を継ぎ、二人の弟は王族として領

地を与えられたが良く考えたら王のほづが良い」とこね出して、王国は十五年ほど混乱した。馬鹿な弟たちとは別に、前の王にはアルケラオスという怪獣のような名前の庶子が居り生前に認知されていたのだが、この男が名前どおり怪しかった。

紀元前四一三年、ギリシア本土ではアテネ市とスパルタ市を中心とする都市国家の争い「ペロポネーソス戦争」の決勝戦が行われようとしている段階であったが、マケドニアではベルデッカス二世が七歳の息子の心配をしながら病死した。

父王の心配は的中し王位継承権を持つ小学生の周りには不気味なオジサンが群れていた。二人の叔父は笑顔で葬式に出ていたが、それが最後の笑いになり間もなく怪獣アルケラオスに喰われた。アルケラオスは国王急死の混乱に乗じて七歳の子を始め王族の悉（ことごとく）を肅清して王位に就き、スツキリした気持ちで国政に関わった。

世の中、矛盾することが多いものであり、この王様は悪人だが、良く言えば有能で活動的、十二年間の統治期間中にもまず国の組織を改革し、軍制を整備し、道路を拓き、城を堅固にするなど国力の強化に努めてマケドニア王国を軍事大国に仕上げた。此の併て繁栄すると「悪」を讃えることになるので余計な心配をしていたが或る日、一番に信頼していた親友に暗殺されてしまった。理由は不明だが隣国の謀略が推測されている。

アルケラオス王の息子は未成年であったから重臣たちが王の遠縁に当る者を後見人に指名して取り敢えず即位させることにした。ところが、この後見人が少年王を後見しないで暗殺した。勿論、自分が王位を狙ったのであるが、アルケラオス王には即位前に愛人が生んだ庶子が居て「…それな

らば俺も！」と後見人を消してしまった。

こうなると安直なミスリードドラマと同じく殺人の連鎖が起こるだけで見ている方は飽きるが、途中を省略するとアレキサンダー大王に至る血筋が分からなくなるので、もう少し御辛抱下さい：さて次には、即位を目前にしていたアルケラオス王の庶子が、消された後見人の息子から「父親の仇」として暗殺された。王の切符はこの男に渡りそこで早く王宮行き汽車に乗れば良かったのだが嬉しくなつて従兄弟に切符を見せた。従兄弟も「もしかして俺にも権利が…」と半分は王に成りかけた後見人の息子（自分の従兄弟）を暗殺して王位に就き「アミュンタス二世」と名乗ることにした。これで、やっと暗殺すべき王位対象者がゼロになりマケドニア王宮は静かになった。

このアミュンタス二世が本来のマケドニア王家の血筋なのかどうか、疑えば怪しい部分もあるようだが、同様の事例は日本の歴史にも見られるしギリシアを侵略したペルシア帝国のダリウス大王も素性のはつきりしない人物であった。それは兎も角、アミュンタス二世は陰険な性格、小心な野心家だったようで、国王として何の実績も無く強いて言えば「孫がアレキサンダー大王であった」ことが歴史的な功績になるのであるだろうか？

暗殺合戦に勝ち残つてマケドニア国王になつてはみたものの、アミュンタス二世は王様の仕事が楽で儲かるものではないことを思い知らされた。借金が有つた訳では無くギリシア社会では裕福なマケドニアは、その頃から山向こうの異民族に狙われていたのである。壹の章で触れた現在のアルバニアに住むエピロス人やイリュリ人である。この民族は先祖がイタリア人と同じだと言われ

好奇心が旺盛なのか、早い段階から国境の山脈を越えてマケドニアに出没しており特にイリュリ人による浸食活動は目立っていた。自分たちの国にも平野部は有るのだが、アルバニアと言つる名称自体が「山国」を意味しているとか、アドリア海沿岸部の狭い地域だけで物足りない。南に横たわる山脈の低い所は五〇〇mほどで、少し息切れはするが何とか越せる。マケドニア領に入り込んで王室の暗殺劇を観ていた。アミュンタス二世が無賃乗車のような手段で国王になった経緯も知っておりマケドニア国民が国王を見る目に少し猜疑心の有ることを察しているから、紀元前三七〇年代ぐらいのある時期に一気に攻め込んできた。

交代が激しく何代前かも忘れたような王様のアルケラオスが軍備を増強してはいたのだが、兵士たちが忠誠を尽くす前に「王様は本物なのか？」を確認しなければならぬ。マケドニアは忽ちイリュリ軍に占領されてしまった。王宮が置かれた首都の「アイガイ」さえも数年間は異国（イリュリ）に抑えられていたようである。

ところで、日本では古代の首都遺跡が概ね分かっているが古墳の埋葬者は宮内庁の嘘と秘密主義から未だに説明されていない。ギリシアの場合も似たような状況ながら、マケドニア王国の首都「アイガイ」については近年になって従来の比定地が否定されてしまった。（駄洒落では無く）イギリスのハモンドと言う古代史研究学者が先ず新説を主張し、その説を昔の章で触れたようにギリシア一番の考古学者「テサロニキ大学のマノリス・アンドロニコス博士が発掘調査の結果から支持した。

二千何百年間に亘り「アイガイ」だとされてきたのはマケドニア北部にある都市「エデッサ」で、

自然が美しくギリシアでは珍しい灌のある町として知られている。悪口を言う訳では無いが、灌とは言っても、茨城が誇る「袋田の灌」を見た後だと水路の堰（せき）が壊れて崖下へ流れるようなもので「灌です」と言い切るには決心が要る。それは忘れて貰ってマケドニア西部にはベルミオ山系が南北に走っている。山脈の東南端丘陵地には「ベリア」という町があるのだが、その町は聖パウロがローマへキリスト教伝道に向かう途中で初めて布教活動をした場所なのである。西暦五十年頃のこととされる。（キリスト教発祥の地）

古代の首都アイガイとしてエデッサに取って代わったのは、聖地ベリアから東南へ二十kmほど離れたハリアクモン川の沖積平野にある都市「ベルギナ」である。大昔のハリアクモン川は海岸線だったようで町は日本より千年以上も早い時代の古墳群と隣り合わせに存在している。都市開発に伴って壊されていた古墳もマケドニア王国の首都だと言われてからは大事にされているのであろう。

そしてベリアから五十kmほど山系に沿い果樹産地の平原を北上した高地にあるのがエデッサの町であり、旧ユーゴスラビアとの国境までは数十kmの地点であるからマケドニア王国領域のほぼ中心に位置していた。イリュリが攻め込んで簡単に占領されたことが領ける位置関係である。勿論、エデッサの近辺にも古墳群が存在していて、アテナから観光コースの調査に行き、発掘中の古墳を見つけて喜んだ旅行社員に、現地のオジさんがこんなものは**なんぼでも**ある！と言ったらしい。

では、なぜ専門の学者がマケドニア王国の首都跡を急に「エデッサ」から「ベルギナ」に変えたのであるのか？ベルギナはアレキサンダー大王の

死後に興ったアンティゴノス朝の首都であった。急死した大王の後継争いで三人の武將が「エジプト」と「シリア」と「マケドニア」をそれぞれに奪い、それぞれの王朝を建てた中の一国である。ついでに言えばクレオパトラはエジプトを取ったプトレマイオス朝の女王の一人に過ぎない。

アンティゴノス朝がマケドニア王朝の後継者を自任して領地を治めたとすれば、首都も従来の王都を選ぶであろう。とする発想から考えれば「ベルギナ」アイガイ説が成り立つ。さらにベルギナ古墳の発掘調査を続けていたアンドロニコス博士と愛弟子のドウロウゴ女史の調査隊が一九七七年に途方も無い物を発見した。それは燦然と輝く黄金の箱、金の縁取りがある鏡、黄金のマスク、首飾りなどなどで「豪華な副葬品を埋めた古墳の近くにある都市跡こそ王都」とされたのである。

それらの金製品や武器、土器、石像などを展示するテサロニキ市（マケドニア第一、ギリシア第二の都市）の博物館は一躍、世界有数の博物館になったが、金製品などが出る前には「見る価値も無い博物館」と言われていた。学術的にも貴重なベルギナ遺跡などの出土品は博物館の名を高めただけでなく、アレキサンダーの故国として知られながら考古学的裏付けが出来なかったマケドニア王国の存在をも立証することになったのである。

そのマケドニア王家も、創始者のベルデッサ一世からは他人同様に血縁の遠くなったアミュンタス三世の時代には、国家全体が異国のイリュリ人に占領されていたので、とても「金」どころでは無い。国王はギリシア本土寄りの隣国テッサリアに泣き込んで亡命させて貰った。テッサリアもイリュリの侵攻は阻止しなければならぬから、

アミュンタス三世を保護すると共にイリユリと水面下で交渉を続けた。二年後に、テッサリアの幹旋でイリユリ軍のマケドニアからの撤退。マケドニアはイリユリの属国として貢物や税を納める。条件でアミュンタス三世は故国へ戻れた。

国王として何もしなかった(出来なかった)アミュンタス三世は在位期間が二十年もある。その様な状態なので三人の王子の母親である王妃が極めて過激な女性であつたらしく、自分の愛人を国王にする目的で息子二人を暗殺している。暗殺はされたが長男はアレクサンドロス二世として二年間王位にあつた。死後は当然のように母の愛人が国王となつたので、「これではならぬ」と忠臣たちが知人を頼つてギリシア本土のテーベ市庁舎へ駆け込んだ。テーベ市ではマケドニアに軍隊を送り込んで、内政の調停を行わせた。その結果、残された王の弟二人のうち兄のベルディッカスは母親の愛人を後見人として将来の国王となることが約束され、末弟のフィリポスは人質としてテーベ市へ行かされた。これは暗殺から守るためと解釈されている。このことがフィリポスに幸いした。

紀元前三六五年、三年間待つて待ちくたびれたベルディッカスは後見人(母親の愛人)を抹殺することに成功し、ベルディッカス三世として王位に就いた。事が順調に運んだので自信を持った若い国王はその勢いで支配国のイリユリを攻めた。世間知らずの思いつきで始めた戦争に勝てる訳は無くベルディッカス三世はマケドニア兵士四千人と共に戦死して異国支配は変わらなかつた。ただし別の説では王の戦死が「暗殺」になつている。

暗殺の黒幕は母親のエウリュディケ王妃であり愛人を殺された女性の怨念からすれば有りそうな

ことなのだが:「暗殺説」を主張したのはユスチヌス一世だそうで、この人はマケドニア出身とされる。自分の後継者(ビザンツ帝国皇帝)に甥を呼び寄せた。その甥が帝国の栄光を築きあげた。ことよりも頭の良いストリッパの女性を皇后にしたユステイニアヌス一世であるから、女性がらみの事件の真相は伯父・甥ともに詳しかつたのである。そこで私はベルディッカス三世たちの母親はイリユリ人であり、イリユリに敵対する意図を持つた息子が消されたのだと推測している。

ベルディッカス三世には遺児がいた。王となるには幼少だつたため、重臣たちがテーベ市の人質となつている(避難している)叔父のフィリポスを後見人として呼び戻した。フィリポスは、後見人に懲りている重臣たちの心配を裏切らず、マケドニアに戻つて辞令を受け取る前に自分が国王の椅子に座り「フィリポス二世」を名乗つて勝手に即位した。誰も文句を言えず、そうなるの後見を受ける先王の子(甥)は存在の意義を失つので何時の間にかこの世から居なくなつた。

そして、母親のエウリュディケ王妃は親孝行? な息子から「苦痛の無い方法でお眠りください」と親切に言われ仕方なく自害した。母親の暗殺から逃れるために多感な少年時代をテーベ市の人質として過ごしたフィリポスの心には冷たい理性が宿していたようで、後に諸都市と組んで敵対した都市国家テーベは特に厳しい処分を受けたようである。勤ぐれば首都の移転(エデッサからベルギナ)がフィリポス即位の頃にあつたのかも知れない。孝行息子が嫌な思い出を消すために、そのような記述は、どの史書にも無いのであるが: 紀元前三五七年、二十三歳で(強引に)マケド

ニアを相続したフィリポス二世は、先祖がしたように、過去の王朝に繋がる親戚一同をチエックして自分に危険な人物は抹殺し、力のなさそう人物は遠くへ追放した。まず王朝の基盤を安定させた新国王は次に軍制の改革に着手した。マケドニアの伝統的な軍隊は「ヘクタロイ(朋友)」と呼ばれた貴族中心の騎兵隊が主力であつたが、改革によりヘクタロイの陰で目立たなかつた歩兵隊(土地所有者から志願)を騎兵隊に合わせて相互に補完する軍団にあらため、さらに自分が人質として暮らしたテーベ市の指導者エバミノンダスが編み出した「斜線戦法」を採り入れることにした。これにより、当時のギリシアでは最強の軍隊がマケドニア王国に出来上がったのである。

フィリポス二世は自ら陣頭に立つて強力な軍隊の指揮を執り周辺地域への侵攻を開始した。執拗に狙われたのは「金山」である。狩猟採取から農耕牧畜へ、さらに流通経済に発展した人類はなぜか「金ピカ」に執着するようで、古墳から出たフィリポスの棺は菊の紋を付けた金の箱だつた。

編集事務局 〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)

URL:<http://www.rekishinosato.com/kazenokai/>

ことば座「風の塾」生徒募集中!!

ことば座では、暮らしの中で新しい自分を発見し、表現するための後押しをする

教室「風の塾」を開いています。(各教室は月2回の授業。受講料月額3,000円)

絵と一行文教室 (講師: 兼平ちえこ 白井啓治)

詩を手話で舞う「朗読舞教室」(講師: 小林幸枝 白井啓治)

エッセイ教室 (講師: 白井啓治)

朗読教室 (講師: 白井啓治)

10月13日~18日まで「絵と一行文教室」の作品が、ギター文化館「風の会&ことば座3周年展」にて展示されます。また、10月16日(金)13:30より、朗読教室の発表会が行われます。

入塾および教室の詳細は、下記「ことば座事務局」(担当: 白井)
電話 0299-24-2063 までお問い合わせください。

ことば座俳優塾、研究生募集中!!

ことば座では、朗読舞及び朗読舞劇に朗読する、朗読俳優志望者(若干名)を募集しております。研修期間は12ヶ月。演劇としての朗読の基礎と演技手話を学んで頂きます。

研修後は、ことば座劇団員として活動して頂きます。

研修料月額30,000円。(入塾には簡単な適性審査があります)詳しくは、上記ことば座事務局までお問い合わせください。

補聴器専門店 いしおか補聴器

補聴器は、大きく聞こえれば良いというものではありません。音がクリアに聞こえるためには、音量を上げるだけではいけないのです。医師の正しい診断と、補聴器専門店としてのスキルが大切です。合わないメガネで目を悪化させることと同じことが補聴器にも言えます。お気軽にご相談ください。

当店は、「ふるさと風の会」「ことば座」を応援し、会報や風の文庫、ことば座公演チケットなどを取り扱っております。また、風の会のことば絵作家、兼平ちえこさんの絵が常時展示してありますので、お気軽に、お立ち寄りください。

(石岡市勤労青少年ホームの並び、直ぐそば。駐車可)

石岡市石岡2158 6

電話0299-24-3881

補聴器下取りセール実施中

(壊れている)(合わない)(買い換えたい)

このような補聴器を新しくしませんか?

どんな補聴器でも下取りさせていただきます。

下取り価格: 10,000円で下取ります。

期間 2009年10月31日まで

ふるさとの歴史・文化を知る朗読会

いしおか補聴器では、11月からふるさと歴史物語作家の打田昇三さんの作品を、ことば座の協力で、朗読に聞く会を毎月第2土曜日(19時~)開いていこうと考えております。ふるさとの歴史や伝承物語を、囲炉裏を囲むような形で、生の声に聞くことによって、自分達の住むふるさとの良さを、再認識することが出来るのではないかと考えております。

11月第一朗読会は「国分寺余話・仏教伝来」です。定員10名となりますので、ご予約の連絡を頂ければと思います。朗読会料金(1,000円・・・コーヒーorお茶、お菓子付き)朗読後、作家を囲んでのお話し会があります。

石岡市柴間ギター文化館発「常世の国の恋物語百」

ことば座 3周年記念公演 & 第16回定期公演

2009年10月16, 17, 18日

2009年10月17日で、ことば座は創設3周年を迎えることとなりました。
皆さま方のご支援のおかげと、劇団員一同感謝いたしております。

3周年記念公演では小林幸枝お気に入りの恋物語3作品を、定期公演では「ふんどし侍」高木崇光との共演で、新しい朗読舞劇の表現に挑戦します。

3周年記念公演 (10月16, 17日: 18時開演)

16日「恋瀬川物語」「漆黒と雑木林と星たち」

17日「緋桜怨節」(菖蒲沢薬師堂弁天池秘聞)

第16回定期公演「常世の国の恋物語第22話」(10月18日: 14時開演)

閑居山磨崖仏秘話

閑居山に磨崖仏の百体が彫られた真実が今明かされる。百体の仏の意味は徳一法師の言葉にあった。3周年記念に当たる第16回公演は、ディジリドゥ奏者、自称「禪侍」の高木崇光を招いての朗読舞劇です。

人の心には
百の表情(すがた)がある
人の心には
百の容(かたち)がある
意地悪の表情、容もあれば、
慈悲の表情、容も持っている
一つを見て
決して一のすべてを
断ずることなし

脚本: 演出 白井 啓治
舞台背景画 兼平ちえこ
舞台装美 小林 一男

朗 読 しらみひろぢ
朗読舞 小林 幸枝
高木 崇光
(ディジリドゥ演奏)

信ずるものは 信じられるものは 唯一美
信じられるものは心の美
心の美は容ありて容なし
匂いありて匂いなし
表情ありて表情なし
裏切りも人の美の容
姑息も 卑猥も 人の心の美の容

入場券 3,000 円 (前売券 2,500 円 3日間通し券 6,000 円) 小学生 1500 円

前売券は、ギター文化館 0299-46-2457

いしおか補聴器 0299-24-3881 で取り扱っております。